AAC

AICHI ARTS CENTER

アートを読む、あいちを読む

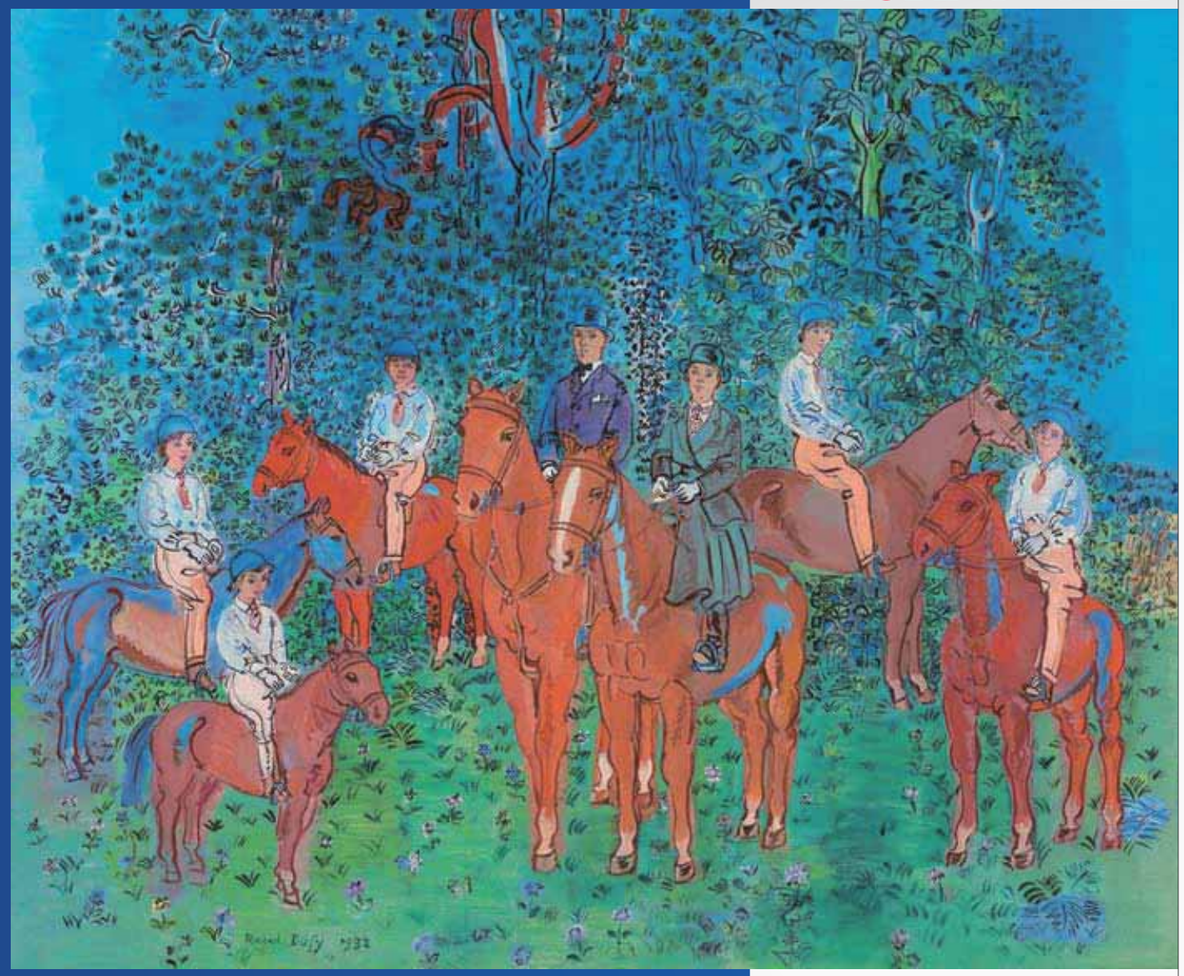
2014 Autumn / vol.81

愛知芸術文化センター　情報誌

|特集|

美し国（うま）　フランス vs スペイン

RÉTROSPECTIVE RAOUL DUFY



《馬に乗ったケスラー一家》写真左
1932年　油彩・カンヴァス　テート
©Tate, London 2014

建築空間と融合する装飾壁画

石油会社の創業者であるオランダ系イギリス人、ジャン=パティスト・オーガスト・ケスラーの注文による集合肖像画。デュフィの油彩の中でもサイズが大きいこの作品は、木や人、馬に使われている青色と、中央の幹や馬の茶褐色とがコントラストを成す。また全体に細かい木の葉が満ちあふれた装飾性豊かなこの作品は、ケスラー家の階段の踊り場を飾った。

《トゥルーヴィルのポスター》
1906年　油彩・カンヴァス
パリ国立近代美術館　ポンピドゥー・センター
©Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais/Philippe Migeat/distributed by AMF

フォーヴィスムの衝撃

1905年にマティスの《豪奢、静寂、逸楽》を観て衝撃を受けたデュフィが翌年、故郷近くのトゥルーヴィルで描いた本作にはフォーヴィスムの影響あり。くっきりした輪郭線や影になった人物など、現実の色からは逸脱している。ただ、原色鮮やかなマティスらに比べ、色遣いはパステル調で優しい。フォーヴィスム=野獣派と違った、デュフィ生来の色彩感覚がうかがえる。

《浴女、騎手、馬が装飾された庭》
1927年　陶土、化粧掛け、錫を含む釉薬、掻き落とし、筆による施釉
ラロック=グラノフ・コレクション、パリ

どんな現場にもアートは宿る

デュフィは20世紀初頭の4年間、木版画に熱中。ドイツ表現主義への興味も手伝って、モノクロの世界に装飾的な華やかさや原始的な力強さを表現した。その才能はテキスタイルの分野でも開花。ファッションデザイナーのポール・ポワレと始めた製作所「小さな工場」では植物や風景、幾何学的模様など多様なモチーフの布地が生産された。さらにデュフィは家具や陶器、室内庭園と呼ばれる園芸グッズなど日用品の絵柄も手掛け、純粋なアートと"用の美"を自在に行き来した。なお、テキスタイルの経験で覚えた布地の柄のにじみという現象がヒントとなり、線は線、色は色で自立したデュフィの画風も確立されていく。

ポール・ポワレ《コート・ドレス》
1920年 公益財団法人京都服飾文化研究財団
広川泰士撮影

《愛》
1910年　木版・紙
フランス国立図書館
版画・写真部門
©Bibliothèque nationale de France

art

フランスの色彩豊かなお洒落感

その奥の、デュフィの実像に迫る!

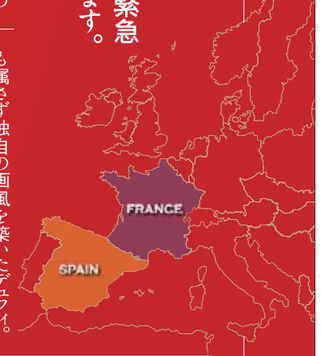
取材・文：編集部

この秋の愛知芸術文化センターは、フランスとスペインが生んだ芸術の競演で盛り上がる！そこで、ちょっとリニューアルした本誌では、ふたつの国の緊急対決企画を敢行!? 両国の文化と魅力を紹介しちゃいます。まずはフランスの先攻で！

20世紀前半に活躍したラウル・デュフィは、絵画のみならずテキスタイルや日用品も手掛け、フランスの美学を存分に表現したアーティストだ。一方で、近年まで正当な評価に恵まれなかった不遇の歴史も。デュフィといえば明るく色彩豊かな画風を語られがちで、女性好みのお洒落なイメージも強いけれど、果たしてそれだけが作家の実像なのだろうか。本展では、これまであまり光の当たらなかったデュフィの本質へと迫っていく。

まず初期から晩年までの代表作が並ぶ回顧展という趣向が貴重。音楽を愛したデュフィらしい《ヴァイオリンのある静物：バッハへのオマージュ》といった有名な絵画も出品されるが、故郷の港町ル・アーブル時代に描いた穏やかな正統派の風景画や、ブラックと切磋琢磨したレスタック時代のポスト印象派的作品など、創作の変遷を見るだけでも楽しい。また、デュフィは独ミュンヘン旅行後の一時期、木版画の制作にも熱中。モノクロでも独創性に富んだ世界を表現し、その経験はテキスタイルの分野でも生かされた。さらに注目すべきは、鉛筆でのデッサンや水彩画から感じられる巧みな線、自在な筆遣いの妙――。

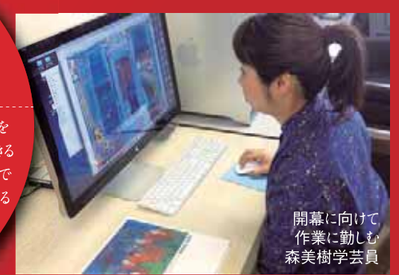
パリで印象派の洗礼を受け、フォーヴィスムのマティスに憧れ、セザンヌやブラックにも刺激され、時にドイツ表現主義の作品にも興味を持つが、結局どこにも属さず独自の画風を築いたデュフィ。その過程をたどることで、彼が探求した芸術性の本質が浮かび上がる。会場に足を運べば、デュフィの違った顔が見えてくるかもしれない。



担当者はこう推す!

愛知県美術館学芸員
森 美樹

「従来のイメージをくつがえし、デュフィの正しい評価を伝える展覧会を目指して準備してきました。彼は"生きる喜び"を描いた画家には違いありませんが、それだけでは零れ落ちてしまうものが多すぎます。様式を重視する20世紀の美術史において見落とされてしまった、デュフィの芸術のより深く多面的な部分を知っていただければと思います」



開幕に向けて作業に勤しむ森美樹学芸員

5つの項目で知るデュフィの多面性

《ニースの窓辺》
1928年　油彩・カンヴァス　島根県立美術館

大好きな南仏、大好きな青い色

デュフィいわく「青はそのすべての段階において、本来の個性を保ち続ける唯一の色彩」。何かが混じっても青であり続けるその色の表情を楽しむように、本作では空や海、遠くの山々や部屋の中までが多彩な青で表現されている。ニースなど高級リゾートひしめく南仏は、ルノワールやマティス同様、デュフィが創作の場として愛した地。ビーチにはヤシの木、広い大通りにカジノなどが並ぶ優雅な景色は、まばゆいほどに輝いている。

《黒い貨物船と虹》
1949年頃　油彩・カンヴァス　三重県立美術館

光を表す黒、その色彩理論に唖然

「これもデュフィ？」とお思いだろうか。彼が最晩年に取り組んだ《黒い貨物船》シリーズでは、黒色が光として表現されている。絵画における光を、太陽の光ではなく"色彩の構成によって生まれる調和"だと理論だてたデュフィは、黒でさえも光を感じさせることが可能だと考えたのだ。ちなみに、本作の貨物船は一度塗った絵具を引っ掻いて下の層から白を浮かび上がらせているので、本物をよくご覧あれ。

ガヤのひと言 ～スペインとの関係～

デュフィが時代を共にした画家の中にはスペインのピカソもいたが、影響はほぼ受けず。ただ、かの国とご縁はあった。デュフィの陶芸の多くを制作したアルティガスがカタルーニャ出身だったからだ。また、ピカソとデュフィをめぐっては1937年・パリ万博でのエピソードも面白い。この時、デュフィは《電気の精》を、ピカソは《ゲルニカ》を出品。どちらも壁画の歴史的大作だが、会場では華やかで楽しげな《電気の精》がより多くの鑑賞者を集めたという。

デュフィ展
10月9日（木）～12月7日（日）
愛知県美術館
10:00～18:00　※金曜は20:00まで
（入館は閉館の30分前まで）
月曜休館　※休日の場合、翌平日が休館
一般1,400円　高校・大学生1,100円
※前売・団体は各200円引き　※中学生以下は無料

Check! ひと足先に鑑賞して心引かれたのは、まずデュフィが故郷を描いた初期作品《夕暮れ時のル・アーブルの港》。全体に暗い画面のなか水面に映る街の灯が印象的です。あと、《カルタジローネ》は美味しそうだなと……!? 共感してくださる方、ご一報ください（笑）。㊝

Check! 実は㊝、愛知の前の巡回地・大阪「あべのハルカス美術館」に行ってきました！その日は悪天候にも関わらず、小学生ぐらいのお子さんから若い男女、お年をめしたご夫婦まで多彩な来場者が続々。さすが大阪の新名所、どこもかしこも大賑わいです。

dance

スペインの秘めたる情熱

ジョゼ芸術監督、就任後初登場!

後攻はスペイン。奇しくもフランスとゆかりの深いジョゼ・マルティネズがスペイン国立ダンスカンパニーの芸術監督就任後初めて日本に登場!新たな環境での抱負や、本邦初演プログラムの見どころを聞かせてくれた。

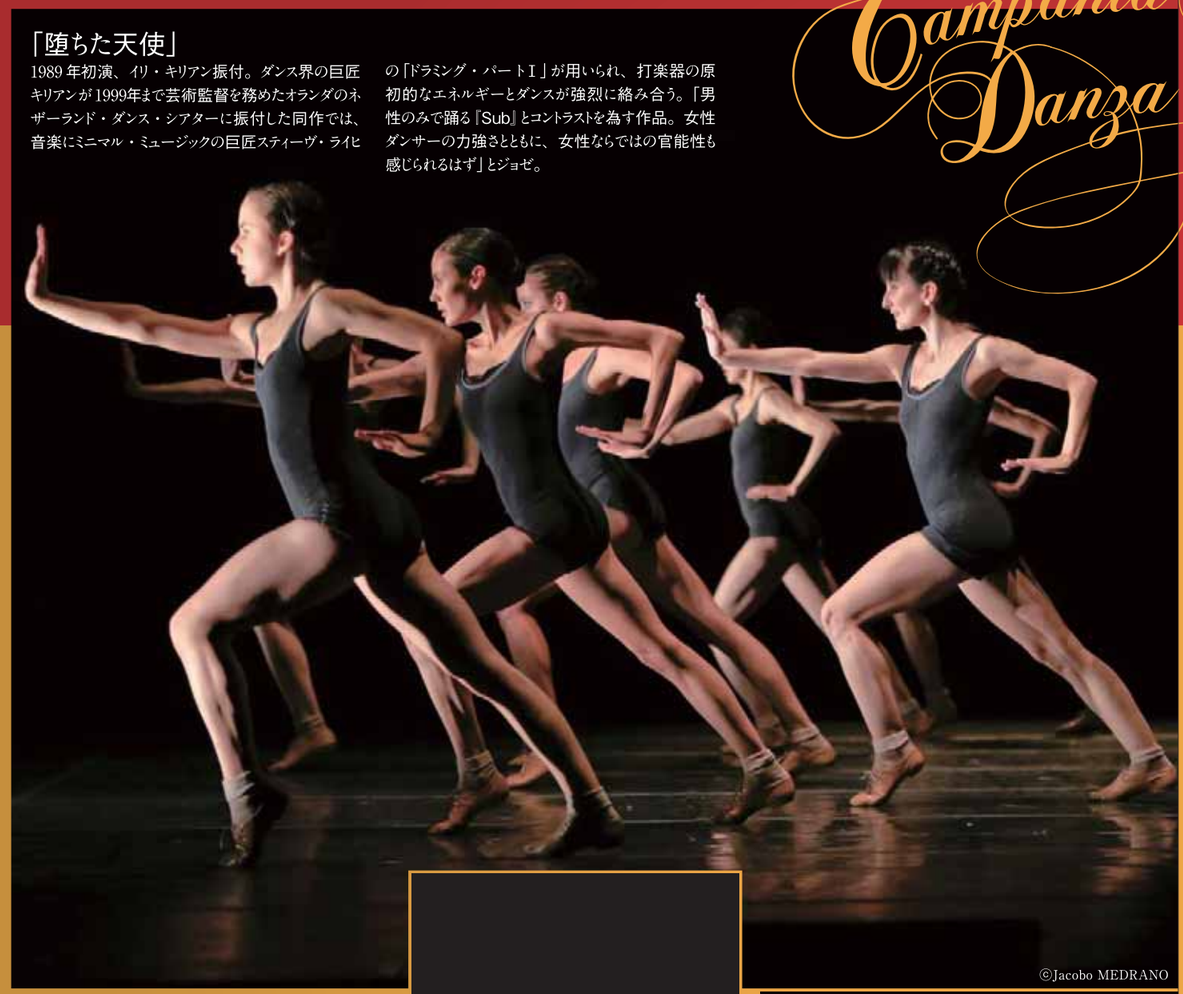
ジョゼ・マルティネズが母国のスペイン国立ダンスカンパニーの芸術監督に就任したのは2011年。今回それ以来初の日本公演だが、ちょうど機が熟したと言えるのだろう。「このカンパニーは3年の間にとても変化しました。新しい風を入れるべく新しいレパートリーに挑み、それらはコンテンポラリー、モダン、クラシックと幅広い。今回その3年をすべて見ていただけるような、多彩な演目をご覧いただくいい機会になります」

彼が打ち出した活動の軸は3つ。ひとつは古典への取り組み、もうひとつは若い振付家の発掘、そして現代の優れた振付家へのアプローチだ。中でもトウシューズで踊ることを見直したのは他と逆をいく展開だが、ジョゼはコンテンポラリーでも古典の手法を用いることで豊かなダンス経験をもたらすと考え、実際「振付家の要求のバレットが広がった」と話す。結果、彼の言う「古典とコンテンポラリーのマリアージュ」も実現するのだ。

最後にひとつ。ジョゼは「観客席と舞台との境界線を壊すような体験を目指している」とも言った。知的で穏やかな表情の奥に秘めた情熱。彼らの冒険は最先端をいっている!

José Carlos Martínez
ジョゼ・マルティネズ

5つの演目を語る ジョゼの名解説



©Jacobo MEDRANO

「堕ちた天使」

1989年初演、イリ・キリアン振付。ダンス界の巨匠キリアンが1999年まで芸術監督を務めたオランダのネザーランド・ダンス・シアターに振付した同作では、音楽にミニマル・ミュージックの巨匠スティーヴ・ライヒの「ドラミング・パートⅠ」が用いられ、打楽器の原初的なエネルギーとダンスが強烈に絡み合う。「男性のみで踊る『Sub』とコントラストを為す作品。女性ダンサーの力強さとともに、女性ならではの官能性も感じられるはず」とジョゼ。

©EmilioTenorio

「ヘルマン・シュメルマン」

1992年初演、ウィリアム・フォーサイス振付。キリアンと同じく世紀の才能、フォーサイスがニューヨーク・シティ・バレエ団の委嘱作として発表した作品。コンテンポラリーの鬼才があえて古典的な技法を多用した舞台では、ダンサーがトウシューズで爪先立ちする場面もあるが、これがまたオフバランスだったりするから難易度が高く、ダンサー泣かせ! ジョゼは「スピードでもテクニックでも、古典の21世紀的解釈を示します」と意欲満々。

「天井桟敷の人々」より

2008年初演、ジョゼ・マルティネズ振付。ジョゼ芸術監督作品が改訂版となって帰ってくる! 彼がパリ・オペラ座在籍時、同名映画を下敷きに発表したこの傑作は、2013年の日本公演でも観客総立ちとなるほど絶賛された。今回は2幕のパ・ド・ドゥを抜粋披露するが、パリ・オペラ座以外の舞台上演はこれが初めて。ジョゼいわく「全幕観ている方は全体がイメージできて、初めての方は非常に詩的な雰囲気を感じられるでしょう」。

©Jacobo MEDRANO

「マイナス16」

1999年、オハッド・ナハリン振付。注目度上昇の一途、イスラエルのバットシェバ・ダンスカンパニーの芸術監督ナハリンの代表作。ネザーランド・ダンス・シアターⅡのために振付した。イスラエルの民族音楽を含む楽曲のコラージュや、力強いダンスの妙もさることながら、舞台と客席の関係が変化していく光景こそ最大の見モノ。ジョゼも「忘れられない、記憶に残る体験。観客もスペクタクルに巻き込まれるんです」と意味深に語った。

©Jacobo MEDRANO

「Sub」

2009年、イジック・ガリーリ振付。ネザーランド・ダンス・シアターほかに過去60以上も振付。イスラエルの気鋭ガリーリが、代表作をもって日本で初めて本格的に紹介される。未知の才能との出会いは、ジョゼの言葉によってますます期待が膨らむ……!「『Sub』は音と光が密接に関わる作品。そして7人の男性ダンサーが自分を焼き尽くすように踊り尽くす。言いすぎかもしれませんが、パリ・オペラ座をしても上演不可能だと思うほどなんです」

担当者は こう推す!

愛知県芸術劇場シニアプロデューサー
唐津絵理

「キリアンとフォーサイスの作品は、あいちトリエンナーレ2013に出品されたつながりもあり、観客により造詣を深めていただく意味でもプログラムに入れてほしいと依頼しました。逆に『Sub』はジョゼさんからぜひやりたいというお話があって。おかげで、幅広い年代、多彩な振付家の作品を観ていただける場になったと思います」

ジョゼ芸術監督と唐津絵理シニアプロデューサー、なんだか仲むつまじい2ショット

撮影:山崎のりあき

ガヤのひと言 ~フランスとの関係~

ジョゼ・マルティネズが舞踊家の地位を確立したのはパリ・オペラ座時代。1988年、ルドルフ・ヌレエフに選ばれて入団以降、着実にステップアップ。1997年には最高位のエトワールに昇格して活躍する一方、古典の新解釈やコンテンポラリーにも積極的な環境の中で振付でも頭角を現した。いわば、フランスなくしてジョゼなし!? フランスは、彼のキャリアに華々しい栄誉をもたらしたのだ。

スペイン国立ダンスカンパニー
11月30日(日)15:00
愛知県芸術劇場大ホール
S席12,000円 A席10,000円 B席7,000円
学生席(B席・25歳以下)5,000円

Check! ジョゼさんが名古屋に来た際、食べたのが「うなぎ」。なんでも、パリ・オペラ座バレエ団にいた時は来日公演の度に食べていたのだとか。やっぱりうなぎを食べると元気が出るのだそう。 (広報担当F)

Check! カンパニーで踊るスペイン人ダンサーは、一時は数人まで減っていたものの、現在では約4割に。とは言え、その他のメンバーの出身はヨーロッパ、アメリカ、アジアなど、国際色がとても豊か。今回は、日系のダンサーも出演しますよ。 (広報担当F)

心はフランス! 気分はスペイン!!

美し国をもっと堪能したい人のために……
今回のAACを応援してくれたアレやコレやをご紹介

↑魚介のパエリア
→スペイン産ハモンセラーノ

↑牛肉とフォアグラのロッシーニ
←パテ・ド・カンパーニュ

KEYWORD

食べる

同じく名駅のバル Deco 2階は、いまや外飲みのスタンダードと化したスペイン・バルの店。人気はやっぱりスペイン料理の代名詞・パエリア! 独自のアレンジを加えたその味は食べやすく飽きない。また、ほとんどの来店者が注文するというアヒージョは、より濃厚な仕上がりが好評。なお、パエリアは4人前もあり、生ハムは盛り合わせもOKだ。

★

巨匠ルイス・ブニュエル監督と天才画家サルバドール・ダリ、世紀の才能ふたりが手を組んだシュルレアリスム映画の最高峰。有名すぎて誰でも一度は見聞きしたことがあるだろう“目を剃刀で切り裂かれる女性”など、奇妙な夢の断片を見るような映像は鮮烈を通り越してショッキング!

★

詩人・劇作家だったロルカの三大悲劇のひとつ。実際に起きた事件をモチーフにしている。簡単に言うと婚礼を前にした花嫁が元カレと駆け落ちしてしまう物語だが、背景に土着的な因習文化があり、アンダルシアの熱く乾いた風を感じさせる。日本でも上演が多い戯曲だ。岩波文庫版は牛島信明翻訳。

スペイン食堂
バル デコ ニカイ
バル Deco 2階
名古屋市中村区名駅3-18-5
モンマートビル2F
18:00〜翌3:00
(ラストオーダー/翌2:00)
※日・祝のみ17:00〜24:00
無休 ☎052-533-3002

フランス食堂
プチデコ
PETIT deco
名古屋市中村区名駅3-18-5
モンマートビル1F
18:00〜24:00
※日・祝は17:00〜23:00
無休 ☎052-561-3399

気軽に本格フレンチをいただけるPETIT decoは、グルメ激戦区の名駅3丁目でも群を抜いて人気。手作り田舎風ミートローフ「パテ・ド・カンパーニュ」などメニューはどれもお値打ちで、「牛肉とフォアグラのロッシーニ」に至ってはもう価格破壊!? 若きシェフの気合いが伝わる一品一品を惜しげもなく頬張れば、フランス料理の繊細な技に唸らされる。

★

映画監督ジャック・タチ自身が演じる“ユロさん”シリーズの記念すべき第1作目。タチといえば、おしゃれ映画の代名詞だった時期もあるが、身体を駆使したスラプスティックコメディを通して見えてくる人間や世界への眼差しは鋭い。また、音楽的な趣向を生かした映像の妙にもハマります。

★

「かんじんなことは目に見えない」など名言の数々でも知られる永遠のベストセラー。砂漠に不時着した飛行士と星から来た王子の会話は、平易な言葉ながらテグジュペリの深遠な哲学に満ちている。なお、写真は内藤濯翻訳版だが、現在は多彩な日本語訳が出版されているので、いろいろ楽しむのも一興。

KEYWORD

観る

「アンダルシアの犬」
発売元:アイ・ヴィー・シー
価格:1,800円(税別)
※アートライブラリー(1階)に所蔵あり。

「ぼくの伯父さんの休暇」
※インターネット販売あり。

KEYWORD

読む

フェデリコ・ガルシーア・ロルカ
「血の婚礼」他二篇
出版社:岩波書店
※アートライブラリー(1階)に所蔵あり。

サン=テグジュペリ
「星の王子さま」
出版社:岩波書店

Check! 表紙撮影にもご協力いただいた「PETIT deco」と「バル Deco 2階」は姉妹店。もともとフレンチの修業をされたオーナーがスペイン・バルの営業に挑戦。後に1階も借り、今度はフレンチ革命に挑んでいる。店長はじめ両店のみなさん、本当にありがとうございました!

ヨーロッパの精神を支えるパイプオルガンの響き

〜藤吉オルガン製作工房レポート〜

フランスのノートルダム大聖堂、スペインのサグラダ・ファミリアなど、教会は観光名所となるほどヨーロッパ文化を象徴している。そして、教会と切っても切り離せないのがパイプオルガンだ。その製作工房が、岐阜県の白川町にあることをご存じだろうか? 思いがけず近くにあったヨーロッパとの懸け橋について知るため、藤吉オルガンを訪ねた。

藤吉正吾さんと工房の風景。
廃校になった小学校を借り受けている

藤吉オルガンの代表・藤吉正吾さんは、もともとピアノの調律師。ところが、日本のオルガン製作の第一人者・辻宏さんと出会い、その音に惚れ込んで、弟子入りを試みる。「最初はけんもほろろに断られたんですよ(苦笑)。でも諦められず、追っかけみたいなことを3年ほどしていたら、ある日、電話が掛かってきて。ちょうど辞める人がいて、その後に入れたんです。当時は兄弟子が5人いましたし、忙しかったんですよね」

夢の第一歩を踏み出した藤吉さんだが、徒弟制度の世界は厳しく、3度も辞表を書いたという。その度に辻さんに丸め込まれた(!?)そうだが、一体どんな方だったのだろう。「プロテスタントの熱心な信者で、オルガンは“神様の楽器”という感覚が強い人でした。晩年はよく『神様への捧げ物としてのオルガンとは…』とも言っていて……。だから教会のオルガン作りを大事にしていました。辻はオルガンを通じて〈祈りの〉〈場〉を作り、支えたかったんだと思うんです。その想いは僕も継承したい」

今は亡き師のもとに最後まで残り、40台ものオルガンを共に製作した藤吉さん。辻オルガンは地元・岐阜のサラマンカホールはじめ、全国の教会や音楽ホールで今日も美しく響いている。そして辻スピリッツは藤吉オルガンへと受け継がれ、日本のオルガン文化の明日を支えていく。

かんなで削って慎重に厚みを整えた板を筒状に加工、大小さまざまなパイプが作られる

溶かした錫や鉛は、この台の上で板状にのばされる。台の中身は保温性のいい御影石。そこから下がっている布は消防士の防火服と同じ素材

パイプを作るために錫や鉛を溶かす釜は、元給食室に設置

黒板の上に見えるのは解説書の抜粋。これはフランスの書物だが、藤吉さんは辻オルガンの流れを汲んでドイツ、イタリア、スペインの様式で製作している。「ドイツはバッハに合う柔らかい音、イタリアは明るく軽やか、スペインは管楽器の音を出すリード管の充実が特徴です」と藤吉さん。

当たり前だが、口で吹いても音が鳴る。藤吉さんいわく「この笛の鳴りの良し悪しでパイプオルガンの音も決まります」

パイプの響きを試すオルガンの模型

古いオルガンを解体した際に残ったパイプや装飾品は保管している。藤吉さんは「古い物は、手仕事の時代なのに作りが良くて驚き。そういう先人の技術を盗みたくて」と語る。また「ヨーロッパのオルガンは200年、300年たっても使えるが、日本は季節によって湿度の変化が激しく、メンテナンスや調律が難しい。ただ、その問題を含め製作者の責任だと考えます」とも。

愛知県芸術劇場パイプオルガン
カール・シュッケオルガン製作所(ドイツ)製
93ストップ
手鍵盤5段ペダル付
パイプ本数6,883本

Xmasはオルガンだ! 2014
12月20日(土) 14:00
愛知県芸術劇場コンサートホール
一般2,000円 高校生以下1,200円 ※全席指定
出演:三浦はつみ(オルガン)、桐山建志(ヴァイオリン)、尾崎温子(オーボエ)

Check! 名古屋から車で約2時間。「ホントにこの道? ナビ間違ってない!?」「寡黙な職人さんだったら…」など、不安を抱えつつ向かった道中でしたが、穏やかな田園地帯と藤吉さんの人柄に心癒される取材となりました。藤吉さんありがとうございました! (広報担当K)

愛知県立芸術大学のオーケストラ定期演奏会が幕を開ける。
第25回の節目にあたる今年度から、会場の愛知県芸術劇場と新たなパートナーシップを築いて開催。
劇場プロデューサーが奇しくも愛知芸大出身なので、OBから学生諸君にビシッと喝を入れる
座談会を企画したが……

左から清水綾さん（4年・ヴァイオリン）、
金沢紫さん（4年・ヴァイオリン）、
安田莉子さん（3年・クラリネット）、
鈴木亜美さん（4年・クラリネット）、
森葵さん（3年・トランペット）
撮影：山崎のりあき

職場では見せない笑顔の水野

Aichi University of the Arts

OB水野先輩から喝!?

まだ夏休みの8月。長久手にある愛知芸大の学内は静まり返っていた。そこへ現れたのがオケの有志、金沢紫さん、森葵さん、清水綾さん、鈴木亜美さん、5人とも器楽専攻の授業の子さん。5人とも器楽専攻の授業の一環としてオーケストラに取り組んでいる。一方、劇場の水野学は同大作曲専攻の卒業生だが、彼は元気な女性陣を前に拍子抜け!? 頼もしく聡明な彼女たちに喝など無用だった！

★

――まず、今回のプログラムについて聞かせてください。

金沢「演奏会は年に5回ほどあるんですが、定演は特に気合いの入った選曲になっています」

鈴木「毎回、日本人の作曲家が入るのも外山先生のお考えですね」

清水「初めてやる曲も多くなるので、新しいことの吸収という点でも充実感があります」

安田「その分、曲の資料を集めたり、リサーチに苦労するんですけど（苦笑）」

外山先生とは、日本を代表する指揮者のひとり、外山雄三氏。氏はこれまで25年にわたり愛知芸大の客員教授として指導にあたっており、この定期演奏会でもタクトを振る。

水野「愛知芸大オケは、学生なんだけど学生のレベルじゃないんですよ。数年前にリハーサルにお邪魔したことがあるんだけど、その時も外山先生から厳しい言葉が飛んでましたね」

金沢「外山先生から褒められることは本当ないですね（笑）。ただ、私たちも学生だと思って演奏しているわけじゃなく、ひとりのプレイヤーとして向き合っているので……」

――そう考えると、大曲とされるマーラーの第9番も自然な選曲？

金沢「いや、やっぱり学生のやる曲じゃないですよ（苦笑）。マーラー最後の交響曲ということで、果てる〝イメージもありますし。超難曲なので、合わせるのも大変そう」

水野「そこで僕としては、愛知芸大オケがプロに劣らぬ実力であることを知ってほしくて。一方、学生ならではのフレッシュな感覚や情熱もあるはずなので、ひとりひとりがモチベーションを上げて演奏会にのぞんでくれたら嬉しいですね」

――それでは最後に、読者へのメッセージをお願いします。

金沢「愛知芸大オケはみんな覚悟をもって、本気でやっています。いろんな人のいろんな想いが詰まっているので、ぜひ聴きに来てください！」

PROGRAM

湯浅譲二：オーケストラの時の時

オーケストラ曲から電子音楽まで手掛ける作曲界の巨匠が70年代に発表した作品。湯浅が追求しつづけた〝形式の革新〟を感じられる全3楽章だ。

マーラー：交響曲 第9番

マーラー最後の交響曲。名作の誉れ高く、観客からの人気も絶大だが、プロの演奏家にとっても難曲として知られる。

愛知県立芸術大学管弦楽団
第25回定期演奏会
11月20日（木） 19:00
愛知県芸術劇場コンサートホール
一般1,000円　学生500円　※全席自由
愛知県立芸術大学　芸術情報課 0561-76-2873
愛知芸大オケ　第25回定演　検索

Check! オケとソロどちらが好きかという話題で「私はオケの方が好き。例えば、今回のマーラーの第一トランペットは全体において重要な役割を担っています。私自身は第一パートではないですけど、そこには責任だけでなく晴れがましさもあり、誇らしく思えるんです」と森さん。品格ある言葉に脱帽！（編）

学生インターン研修を終えて

愛知県芸術劇場では、劇場の現場を直接体験する学生インターンを受け入れています。その研修内容は、まず全員にスタッフとして関わってもらう公演実習。事前に打ち合わせを行った上で仕事につきますが、その場で機転を効かした柔軟な対応が必要なことも。他には劇場を会場とした企画立案実習。数人がチームとなり夢の企画を考えてもらい、利用打ち合わせを行います。「コミュニケーションが大切だと思った」「帰る時のお客様の笑顔がうれしかった」など、研修日誌に書かれた感想は、実はどのような仕事にも共通することではないでしょうか。研修を受けられた方々には、これを機会に、ぜひ劇場を含めた芸術に関わる仕事に携わってほしいと思います。

（劇場プロデューサー　藤井明子）

TOPICS

「支配人です、よろしくお願いします！」

愛知県芸術劇場では、今年7月から大ホール・コンサートホール・小ホールそれぞれに、支配人職を新設。大ホールに大脇可子、コンサートホールに富田顕生、小ホールには長瀬武彦が就任した。これまで事業の企画・運営を行ってきた経験を踏まえ、劇場をますます愛される場、活気ある場へと改良していく3人にご期待ください。

小ホール

大ホール

コンサートホール

左から長瀬武彦、大脇可子、富田顕生

MUSEUM SHOP INFO

みなさん、こんにちは。愛知県美術館ミュージアムショップ店長の辻本哲朗です。

10月9日（木）より始まる「デュフィ展」期のコレクション展の1室では、特集展示「木村定三コレクション　茶釜」が開催されます。長く木村氏の茶道具は極一部の方たちしか目にすることのできないお道具でした。今回の展示は千利休「茶杓」など、その愛蔵品の一部が初公開です。

展示では極一部しか紹介されませんが、この秘蔵コレクションの一角を網羅した図録が「茶道具－金属工芸・竹工芸を中心に」。金属と竹による茶道具93点の写真・解説のほか、木村氏の茶会記録も収録されています。

当ショップでは、会期中にこの図録を店頭で販売いたします。展覧会とあわせてぜひお買い求め下さい。

図録「茶道具 －金属工芸・竹工芸を中心に」
2,500円

あいちトリエンナーレ2016 芸術監督決定

2016年の夏から秋に開催が予定されるあいちトリエンナーレ2016の芸術監督が決定し、記者会見を行った。芸術監督に就任したのは写真家・著述家で、多摩美術大学教授の港千尋（みなとちひろ）氏。港氏は文化人類学、特に映像人類学を専門分野として、2006年の釜山ビエンナーレ及び2012年の台北ビエンナーレの共同キュレーター、2007年のヴェネツィアビエンナーレ国際美術展日本館のコミッショナーを務めるなど、国際経験豊かなキュレーターでもある。

港氏は「過去2回の成功をバネに、新しいステージを目指します。芸術祭の主役は観客。旅の経験に例えれば、楽しくて驚きに満ちた、創造的な旅を皆さんと一緒に作っていきたい」と抱負を語った。

Check! 「第19回 アートフィルム・フェスティバル」を、11/23（日・祝）～12/7（日）に12階のアートスペースAにて開催（入場無料）。映像表現の新たな可能性を切り開く作品を、横断的な視点で取り上げます。プログラムは近日中にHPにて発表します。

誌上文化交流

愛知県芸術劇場　館長
丹羽康雄（にわやすお）

鑑賞したのは…

これからの写真

8月1日～9月28日、愛知県美術館にて開催

私が美術に深く興味を持ったのは、高校生のときだった。

アルバイト先の出版社の倉庫でセザンヌのりんごの絵と偶然出会ったのだ。その後、脈略もなくさまざまな展覧会を見てきたが、どういう訳か写真にはあまり興味が湧かなかった。

ところが、同時代に生きる作家の作品だからなのか「これからの写真」展の作品には、不思議な親近感を感じる。知らないはずなのに、見覚えのあるような光景、物、人…。他人の目を借りて世界を見ているような体験に、なんとも胸がざわめくのだ。

この作品がこれから先どんなに良い状況で保管されたとしても、この妙な親しみ、それと同時に感じる胸騒ぎは、今ここで見る我々しか感じられないものなのではないだろうか。

今ここでしか味わえない、という醍醐味は、舞台の十八番であったはずだ。それを「これからの写真」展で感じたことで、私の写真作品に対するイメージは図らずも変えられてしまった。少し悔しい。

長年、写真に興味を持てなかった私でさえ、ふとした切っ掛けで心惹かれていく。これからも、そんな偶然訪れる出会いの瞬間を、美術館や劇場で働く私たちが数多く作っていこうではないか。

愛知県美術館　館長
村田眞宏（むらたまさひろ）

鑑賞したのは…

勅使川原三郎「睡眠 -Sleep-」

8月21日、愛知県芸術劇場大ホールにて公演　撮影：羽鳥直志

「睡眠」の公演が始まってまもなく、不意に、ある彫刻のイメージが出現しました。目の前では勅使川原三郎をはじめとするダンサーたちによる緊張感にみちた動き、洗練された舞台美術や照明、多彩な音楽とが混然となった舞台が展開されていきました。と同時に、その彫刻も繰り返し現れてくるのです。それは男の上半身だけが表された、観ていると何か物語が紡ぎだされてくるような象徴性をたたえて、静かに佇んでいる彫刻で、「睡眠」の舞台とはいわば対局にあるものでした。ダンサーたちがハイレベルな身体表現を繰り返すたびに、「手足をそんなに動かさなくても…、照明や音楽がなくても…」と、その彫刻は語りかけてくるのです。「睡眠」の舞台は、美術作品とは比較にならないほど雄弁で刺激的な世界、それは総合芸術というにふさわしいものでした。でも、だからこそ、その彫刻の存在もまた私には際立ったものとして感じられたのです。公演が終わってから、それが《肩で眠る月》というタイトルだったことを思い出して、ハッとさせられました。

愛知芸術文化センター
情報誌AAC
通巻81　2014年9月号

発　　行：愛知県芸術劇場
（公益財団法人 愛知県文化振興事業団）
印　　刷：鬼頭印刷株式会社
デザイン：江利山浩二（KINGS ROAD）
表紙写真：山崎のりあき
編　　集：小島祐未子（家鴨の編集舎）

次号は12月の発行予定です お楽しみに!

広報担当：小出 充訓

編集後記

「AAC」は情報誌としてリニューアルしました。まずはご協力いただいたすべての方に感謝を申し上げます。振り返れば、2度にわたる発行スケジュールの変更や調整など、このスペースには書ききれないほどの事件!? の連続でしたが、取材先でお聞きした貴重なお話、そして何より芸術を愛する方々の素敵な笑顔が力となりました。今後も出会いを大切に、笑顔が伝わるような情報誌を作っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします!!

©愛知芸術文化センター2014　※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。

夏休みワクワク！ 愛知県芸術劇場 キッズ★プログラム

8月5日～29日
愛知県芸術劇場 各所

撮影：羽鳥直志／中川幸作

夏休みにわたって小学生を対象にした「キッズ★プログラム」が開催され、4回の体験型講座と1回のコンサート鑑賞が無事終了した。

まず最初は、演出家・池山奈都子を迎えたワークショップ「オペラ体験！」。「ヘンゼルとグレーテル」を題材に、AC合唱団有志の協力も得て、合唱の練習をしたり小道具作りで協力し合ったり。集大成となる発表に向けてはゲネプロまで行い、本番をみごと成功させた。

続く「劇場探検ツアー」では、舞台技術グループの浅野チーフが隊長となってコンサートホールに潜入！ 普段は見られない裏側を見学して、子どもたちは大いに盛り上がった。

「ダンス体験！」は、コンテンポラリーダンスを黎明期からリードする勅使川原三郎のワークショップだ。歩くとかスキップなど普段慣れている動きも、徹底的にやることで、みんな目からウロコ!? 子どもたちが理屈抜きに身体そのもので何かをつかみ、上達していく様にも不思議な感動を覚えた。

その後、コンサート鑑賞の企画を挟み、最後は「劇場でエンゲキ体験！」。子供のためのシェイクスピアカンパニーを率いる俳優・演出家の山崎清介の指導のもと、彼らが実際に用いるクラップ（手拍子）の手法などにも挑戦。みんなで息を合わせる面白さを学んだ。

劇場探検ツアー
コンサートホール編
8月12日、コンサートホール

オペラ体験！
8月5・6日、大リハーサル室

劇場でエンゲキ体験！
8月29日、小ホール

パイプオルガン入門コンサート
8月27日、コンサートホール

ダンス体験！
8月19日、大リハーサル室

Report

2016年に没後百年を控え、話題の続く夏目漱石。この文豪に演劇人たちが勝負を挑んだ。

AAFリージョナル・シアターでは「文豪コネクション」と題して、大阪現代舞台芸術協会と日本演出者協会東海ブロックが各々ふたりの演出家を選出。大阪勢は「坊っちゃん」、愛知勢は「こころ」を、それぞれ2バージョンの演出で発表した。観客は斬り口の異なるふたつの「坊っちゃん」「こころ」が楽しめて、全体では4つの舞台が上演されたわけだ。

初期代表作「坊っちゃん」を演出したのはbaghdad cafeの泉寛介、光の領地のくるみざわしん。後期代表作「こころ」には孤独部のかしやましげみつ、NEO企画の菊本健郎が挑んだ。「坊っちゃん」は登場人物が多いが、泉、くるみざわともに下女の清に着目して役者3人でシンプルに舞台化。対して「こころ」は、まずベテラン・菊本がリアリズム的手法で繊細な芝居に。一方、かしやまは昭和の終わりに生まれ、平成という時代と生きてきた自分自身の感覚に、苦悩しながら明治を生きた漱石の心情を思いきって引き寄せた。

公演期間中、4人の演出家が顔を揃えるトーク・イベントも開催。活発な漱石談義が繰り広げられた。

ポスト・パフォーマンス・トークの様子。
左からかしやましげみつ、菊本健郎、司会の平塚直隆、くるみざわしん、泉寛介

AAFリージョナル・シアター2014
～大阪と愛知 vol.1～

文豪コネクション

「こころ」：7月18日～20日
「坊っちゃん」：8月1日～3日
愛知県芸術劇場小ホール

Check! 専門家による解説と実演で、公演演目について事前に学ぶことのできる連続講座「シリーズ・トーク」が9月からスタート。今年はダンス、オペレッタ、オペラの公演に合わせて開催します。詳しくはHPをご覧ください。

FLOOR GUIDE

開扉：9:00　**休館日**：第1・第3月曜日(6月は毎週月曜日)、年末年始

総合案内　レストラン　喫茶店　公衆電話
やさしいトイレ　赤ちゃんコーナー　トイレ　連絡通路有

12F	アートスペースA~H 屋外展示スペース
11F	展望回廊
10F	美術館(所蔵品・企画展示室) 屋外展示スペース ミュージアムショップ
9F	
8F	美術館(ギャラリー)A~J
7F 6F 5F	回遊歩廊
4F	コンサートホール
3F	
2F	大ホール 西玄関・南玄関　オアシス21連絡橋　NHKビル連絡口
1F	アートライブラリー 正面玄関
B1	小ホール
B2	アートプラザ　アートスペースX リハーサル室 オアシス21地下連絡通路
B3 B4 B5	駐車場

INFORMATION

愛知芸術文化センター「メールニュース」登録受付中!

美術館、劇場の情報をEメールで配信中!
ホームページからご登録ください。

愛知県芸術劇場ダイレクトメール会員募集中!

情報誌AACや、先行予約などの主催公演情報をお届けします。
登録費・年会費無料
[申込方法]
必要事項を記入の上、郵送、FAX、Eメールでお申し込みください。
①氏名・ふりがな　②郵便番号・住所　③ご連絡先(電話番号・Eメールアドレス)

ブログ、Facebook、Twitterを行っています!

美術館では、企画展担当学芸員が展覧会を作り上げていくプロセスや、展示作品をより楽しめる情報などを綴ったブログを随時更新しています。またTwitterも試行運用中! 芸術劇場ではFacebook、Twitterを通じて、主催公演のお知らせや劇場にまつわる情報、舞台裏ショット(!?)などなど、随時UPしています。

アクセス

[公共交通機関]
・名古屋市営地下鉄東山線または名城線「栄」駅下車　徒歩5分
・名鉄瀬戸線「栄町」駅下車　徒歩5分
(オアシス21から地下連絡通路または2F連絡橋経由)

[自動車]
名古屋高速東新町出口から3分

[駐車場]
有料駐車場「アートパーク東海」
(愛知芸術文化センター地下3・4・5階 約600台)

愛知芸術文化センター
AICHI ARTS CENTER
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2
TEL(052)971-5511(代表)

お問い合せ

愛知県芸術劇場
(公益財団法人愛知県文化振興事業団)
広報・マーケティング室
TEL:052-955-5506(直通)　FAX:052-971-5541　e-mail:mkt@aaf.or.jp

愛知県文化振興事業団第341回公演

NHK SYMPHONY ORCHESTRA,TOKYO

NHK交響楽団 定期演奏会(愛知県芸術劇場シリーズ)

2015年 2月22日(日) 15:00開演 (14:15開場)
愛知県芸術劇場コンサートホール

N響トランペット奏者
菊本和昭による公開レッスン
※終演後に実施。
詳細は愛知芸術文化センターHP
またはお問い合せ先まで。

©Ixi Chen

指揮／パーヴォ・ヤルヴィ
Paavo Järvi, conductor

©K.Miura

ピアノ／ピョートル・アンデルジェフスキ
Piotr Anderszewski, piano

R.シュトラウス／交響詩「ドン・フアン」作品20
モーツァルト／ピアノ協奏曲 第25番 ハ長調 K.503
R.シュトラウス／交響詩「英雄の生涯」作品40

入場料金：SS席13,000円　S席10,000円　A席8,000円　B席6,500円
C席5,000円(学生2,500円)　D席4,000円(学生2,000円)　車椅子席6,400円
※学生割引は25歳以下に適用(要学生証提示)
※未就学児入場不可。託児サービスあり(要予約)
チケット取扱：10月19日(日)10:00発売
愛知芸術文化センター内プレイガイド・チケットぴあ・アイチケット
※車椅子席は下記までお問い合せください。

主催：愛知芸術文化センター 愛知県芸術劇場
(公益財団法人愛知県文化振興事業団)
NHK名古屋放送局
助成：平成26年度文化庁
劇場・音楽堂等活性化事業

お問い合せ：愛知県芸術劇場(公益財団法人愛知県文化振興事業団)
TEL 052-971-5609　FAX 052-971-5541　http://www.aac.pref.aichi.jp/